

## サッチモちょっといい話 サッチモとディズニー ①

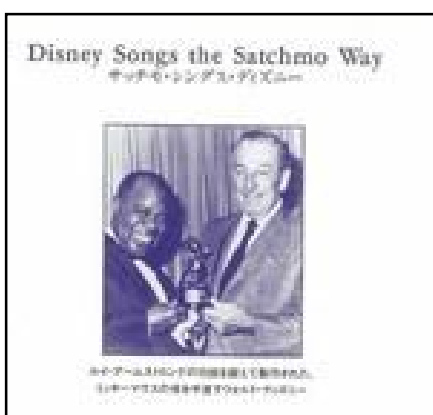
——外山喜雄

### 米を代表する2人の巨人と共に 私たち夫妻が捧げた50年…

一昨年2006年3月、永年にわたった東京ディズニーランドの出演が終わった。思えば1983年開演から23年間、ウォルト・ディズニー翁に仕えたわけだ。

私たちがサッチモに憧れ、サッチモとジャズの故郷ニューオーリンズにジャズ武者修行に出かけたのが1967年。サッチモにのめり込んだのは高校時代だから、1960年前後だろうか。五つの銅貨、真夏の夜のジャズ、サッチモは世界を廻る、グレン・ミラー物語…。高校から

無試験であがれる大学の面接…身上調書に愛読書、サッチモの自伝、My Life in New Orleans、尊敬する人、ビックス・バイダーベック(白人のジャズコル



ネットの天才)などと書き、調子に乗って得々と面接教授に説明し、もう少しで入学を拒否されるほど怒らせてしまった失敗もある。

東京ディズニーランドのレギュラーバンドで入ったのが1983年…言ってみれば、僕たちの50年の音楽人生の半分、25年をサッチモとニューオーリンズに、そして後の半分以上をディズニーに、20世紀のアメリカを代表する二人の巨人に25年ずつ捧げてきたわけだ!!!これは、私たちのちょっとした自慢の種である。

### 何ともシビアなアメリカの雇い主 様々なカルチャーショックに直面

まずランドに入ったときのステージ数の多さ!!!ファンタジーランドの通りでディズニーナンバーやジャズを演奏するバンド、メリー・ポピンズの競馬場の場面にアニメで登場するパーリーバンド、というちょっとコミックなバンド。アメリカ人のスーパーバイザーから来た演奏スケジュールは、30分5回と45分2回の7ステージだった!!!

当時のイベントなどの演奏ステージは45分2回、せいぜい3回…7回はカルチャーショックだった。炎天下、そして真冬の屋外…さすがに体力が持たず、そのうち30分7回

に…最終的にはモウちょっと短くしてもらった。でも、アメリカの雇い主は、大体がこのくらいシビアなのである。

もう知っている人は少ないが、日本にあったアメリカ軍の基地…これも似たような人使いの荒さだった。ニューオーリンズのバーボンストリート、ジャズをやっている店も、45分プレイして15分休みの6ステージ。僕たちが住んでいた頃、午後1時に昼番のバンドが始まり6時45分まで、夜番が7時から12時45分まで…しかも経費節減のため6人編成などまれて、ペット、クラの2管にリズムはベース抜きドラム・ピアノというのも多かった。

その昔グレン・ミラー楽団やアーティー・ショウ楽団、ポップ・クロスビー楽団のリード・トランペットだったジーク・ザーチー…ピリー・ボーン楽団で来日親しい友達になったが、彼は駆け出しの頃の思い出をこう語っていた。「最初のころの仕事は、タクシーダンス・ホールといってね、ダンサーと踊るために客がチケットを買うんだ。バンドは夜8時から4時まで…休憩は無くてね、ピアノがソロをとったりしているときにたばこを吸ったり、休憩するさ…」

### 経費節減で過酷な長時間演奏 ソロの演奏中に休んでいると…

サッチモも似た話をしている。ニューオーリンズの若き日、バンドの演奏は8時から朝4時。休憩なし。ただし、バンドはダンスのために演奏したからファーストとミデアムを2曲続けて演奏、ダンサーが飲み物を買う間休憩した。でも、当時は今のように各楽器のソロは無くバンド全員のアンサンブル重視だったから、曲の間吹きっぱなし…。たまにソロがあって、他のミュージシャンが休んでいると、雇い主が、「6人のバンドを雇ったのに、何であいつは吹いていないんだ?」と文句を言ったそうだ!!!

そう、“音楽は労働”。これがアメリカの考え方のようです。でも、今大リーグが話題になっているように、ジャズの大リーグ、アメリカのプレイヤーは、この酷使を乗り越えた人たち。おまけにいくらでも優秀なプレイヤーがいるから、“同じ技量なら顔のいい奴を”、“技量も顔も同じなら、背の高い方を”みたいな過酷な選択。ノンン…道理でアメリカは上手いわけだ。サッチモも誰も彼も、この過酷な選択を逞しく乗り越えてきた人たちなんだ…というのが、ディズニーランドでの第一のカルチャーショックでした!!!

高校生がいつの間にかジャズスターになっていたり、やたら“〇×王子”が出てきて周りが囁し立てる昨今の傾向…ちょっとこれでいいのかな、とも思う。(続く)

## サッチモちょっといい話 サッチモとディズニー ② ——外山喜雄

1983年東京ディズニーランド開園と同時に始まった私達のディズニー体験。前回に引き続き、アメリカン・エンターテインメントの世界で体験したカルチャーショックの数々。今回は、前号に引き続きその第2弾。

### ディズニーの世界の23年間 “最高の舞台”で貴重な体験

ある日、リハーサルルームで白雪姫、七人のこびと、を加えてリハがあった。モウほんとに映画の“姫”にそっくりな、アメリカ人女性の白雪姫にもうウツリ！ほんとにあの人は似ていた！！で、リハが始まり、ちょっと姫に演技があった。白雪姫が目の前の観客に優しくほほえみかけるのだが、目の前は鏡…でも姫は全くわれ関せず…その目つきは正に、鏡の向こうに実際に人々がいるかのように自然なのだ。お恥ずかしながら、こういう“演技”の世界とは、そのとき初めての遭遇だった…白雪姫の微笑みかけは、今でも印象に残っている。

以来、僕の中でショー・ビジネスの世界への関心が高まっていった。ディズニーという最高の舞台で、ショー・ビジネスを体験する！このディズニーの世界での23年間は、そんな最高のまた、貴重な体験をした23年間だった。

### ジャズも音楽も演技から始まる ミュージシャン達は役者揃い！

“すべての劇場は演技に始まる All theatres begin with acting だったかな…”といった様なことをアメリカ人のスタッフから言われたことがある。theatre シアター、劇場でやること…芝居、ミュージカルはもちろん、ジャズも、音楽も演技から始まる！！

ダニー・ケイ主演の1948年のアメリカ映画、ソング・イズ・ボーン(邦題ヒット・パレード)にはそうそうたるジャズスターが登場する。ライオネル・ハンプトン、ベニー・グッドマン、チャーリー・バーネット、ルイ・ベルソン、トミー・ドーシ

ー…そしてルイ・アームストロング…この皆さんの演技の上手いこと…よく日本語で“役者だなー”というけど、いや、ほんとにあのころのジャズマンは役者揃い…。

いや、モダンにスッ飛んでいるセロニアス・モンクでさえ“エキセントリック”と言うキャラクターを演じ、ディジー・ガレスピーは、ほっぺたを膨らませてビーバップなキャラクターを創作、ブルーな暗さを打ったマイルスでさえ“お客などまるで無視している”と言うキャラで売っている？色々なことが、私が感心した、鏡のズーッと向こうに微笑みかけた白雪姫と同じショー・ビジネス…演技の一種だと私は思えてならない。

ディズニーランドでの永い間の体験で、ジャズの“ショー・ビジネス”という一面…ある意味で、一般にあまり気が付かれていないジャズの本物の姿を知り、貴重な体験をしたと思っている。

### 観衆を“魔法の世界”に誘う サッチモの表現力もお見事！

僕は、ディズニーランドのホーンテッド・マンションが大好きだ…。1936年サッチモが初めて出演したハリウッド映画に“黄金の雨”がある。ディ



Tokyo Disneyland. sreet of fantasy —Musical Walkng Tour —  
CD ジャケットから

ズニーのホーンテッド・マンションにも似た可愛い映画。サッチモ35歳、ハリウッド初出演にして、見事な演技…骸骨と掛け合いで吹き踊るシーンもある。

“Boy, Don’t you go in there, don’t you know that house is Haunted!! オーイ、そこに入るんじゃないよ！！お化けが出るって、知らないかい！！”…このいかにもお化け屋敷らしい、サッチモの台詞と演技が私は大好きだ！

すべての劇場は演技に始まる…この演技とは、お芝居する…その意味だけではない、音楽の様々な表現力も、演技の一部、という意味も持っていると思う。ディズニーランドにいる間に、アメリカ人ならではのショー制作の世界の表側と、それを支える裏側の仕組み、また音楽の効果的な使い方から、観衆を魔法の世界に誘う演出まで、実に様々な体験をさせてもらった。それは、優れたジャズの世界に通ずるものを数多く持っていた。ディズニーランド23年の体験が無かったら、今ほどサッチモの世界を理解する事も無かったかもしれない、と思っている。(続く)



## サッチモちょっといい話

### サッチモとディズニー extra

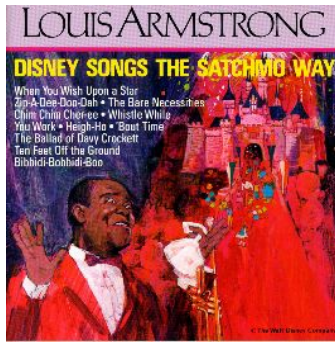
デキシーランド・アット・ディズニーランド

外山喜雄

## ロスのディズニーランドを軌道に乗せた

### デキシーランド・ジャズ

サッチモの名盤レコードといえば、『サッチモ・シングス・ディズニー』（写真右は同CDジャケット）を忘れることは出来ない。ヒビディ・バビディ・ブー、ハイホー、星に願いを、チムチム・チェリー…録音は1968年。ウォルト・ディズニーは2年前、1966年に65歳でこの世を去り、3年後に



はサッチモが69歳で他界してしまった。アメリカを代表する二人の天才の早すぎる死は残念なことだ。それだけ二人とも、ハードワーカーだったと言うことだろうか。

ロスのディズニーランド開園5年後の、1960年から毎年開催されたジャズ・イベント『デキシーランド・アット・ディズニーランド』。1970年までの10年間、デキシーランド・ジャズが毎年秋の恒例イベントとなり、その人気はランドの成功への道を築いたといわれる。ルイ・アームストロングは1961年以来、5回このイベントに出演、この出演がきっかけとなり、サッチモがディズニーを歌う、うれしいレコーディングの実現となった。

2005年にロスのディズニーランドは50周年を迎えた。開園50周年に当たって50年を振り返る多くの記事が登場した中、サッチモとデキシーランド・ジャズがディズニーランドの発展を大きく助けた、とする記事が米 Disney マガジン2005年春号に掲載されている。ここにご紹介する。

## All That Jazz オール・ザット・ジャズ

ディズニーランド50年の歴史を振り返るシリーズ —2005年春—

レベッカ・クライン記者

(訳・外山喜雄)

### エキサイティングなドラマの幕開け 暗闇から蒸気船の鐘の音、汽笛

1960年10月1日午後9時、ディズニーランドのアメリカ河岸边は、大群衆でにぎわっていた。街灯が消えあたりが静まりかえると、暗闇から蒸気船の鐘の音が聞こえ大音響の汽笛とともに外輪船マークトウェイン号が現れた。あたりが明るくなる中、トム・ソーヤー島に集まったアルバート・マクニール合唱団の歌う、アフリカの祈りのメロディーが漂い、まもなくメロディーは黒人霊歌『ダウン・バイ・ザ・リバーサイド』に代わる。ジャズ史研究家フランク・ベルが、デキシーランド・ジャズの発祥と歴史をナレーション。音楽が讃美歌『イン・グローリーランド』の大合唱にかわると、アメリカ河にピンクや青のスポットが当たり、筏の上で演奏するデキシーランド・ジャズの伝説的なプレイヤー達の姿が浮かび上がった。暗闇から登場したのは“キング・クラリネット”と呼ばれる、ジョー・ダレンスバーグのデキシィ・フライヤーズ。バンドの演奏するジョー作曲の『ルイジアナ・アイ・エイ』に観衆の大きな拍手がまき起こった。

### 当初はローカル・タレントも… 世界最高級のバンドが加わる

1950年代の終わり頃のディズニーランド。開園間もなかったランドには世界的なスターをゲスト出演させる予算などなく、当時の出演者はもっぱらローカルなタレントに限られ、スペシャルイベントも低予算の手作り企画がほとんどだった。しかし1960年、第1回の『デキシーランド・アット・ディズニーランド』が企画され、有料の特別企画として開催されたとき、すべてが新しい方向に動きだしたのだ。

この企画には、世界最高クラスのデキシーランド・バンド

6グループが参加。1時間の『サルート・トゥー・デキシーランド(デキシーランド万歳)』と呼ばれるプログラムには、ニューオリンズ・スタイルからシカゴ・スタイル、ブルース、ビッグバンド・デキシィ、そして当時最新のモダンサウンドのデキシィまで参加、デキシィランド・ジャズのあらゆるスタイルをカバーした企画となった。



## ニューオリンズが生んだ60代、70代 伝説的なミュージシャンたちも次々と

アメリカ河には、次から次へと有名バンドの乗った筏が登場…ザ・エリオット・ブラザーズ、ヒット映画『ピート・ケリーズ・ブルース』からディック・キャスカートとピート・ケリーズ・ビッグ・セブン、テディー・バックナー楽団、ボブ・クロスビーのボブ・キャッツ、ディズニーランド専属のストロー・ハッターズ、そしてショーのハイライトは最後の筏に乗ったアルトン・パーネルとヤング・メン・フロム・ニューオリンズだった。8人編成のこの特別編成の楽団のメンバーは全員が60才代、ニューオリンズが生んだ偉大なリズム・ピアニストでリーダーのアルトン・パーネルを始め、ギタリスト及びバンジョー奏者の大物70歳のジョニー・セン・シア他、その一人一人が伝説的な存在のミュージシャン揃い。トム・ソーヤー島では、ブルース歌手モネット・ムーアがアルトン・パーネル楽団と共演した。

## 興奮誘った船上の『聖者の行進』 音楽とダンスは一晚中続いた！

アメリカ河上のバンド・パレードが終わると、花火とともに蒸気船マークトウェイン号が登場、出演者全員が船の上から『聖者の行進』を合奏し会場の興奮を誘った。その後ミュージシャンは、たいまつを先頭にベッシー・ウォーカーの率いるディズニーランド・バンドに合流し園内をパレード、それぞれのグループが持ち場のロケーションに散って行き、その日音楽とダンスは一晚中続いた。

この年の素晴らしいイベントの成功により、デキシールランド・ジャズの宵は翌年も再び復活、ウォルト・ディズニー・スタジオのアニメーター、ウォード・キンボール (tb) とフランク・トーマス (p) (注=二人はディズニーの伝説の9人と呼ばれる名アニメーターの一員、後にディズニー社重役) がメンバーの有名グループ、ファイヤーハウス・ファイ・プラス・トゥー (消防5人組)、そして伝説のトロンボーン奏者キッド・オリと彼のグループ“キング・オブ・ジャズ”にルイ・アームストロングが特別出演した。

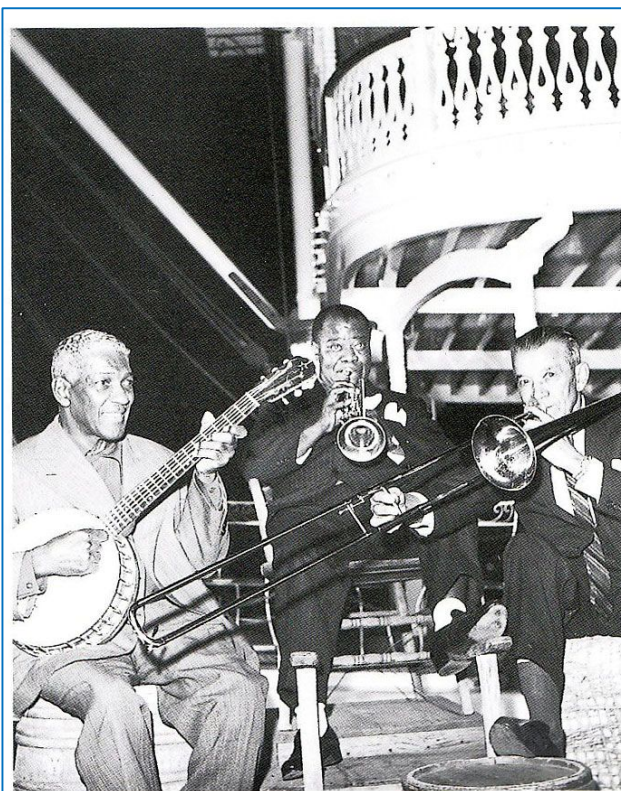


## サッチモ、キッド・オリ、セント・シア ホット・ファイブの3人の豪華企画も

特に素晴らしかったのは、1962年9月30日のイベントだった。1920年代、ルイ・アームストロングのホット・ファイブのメンバーだった3人の奏者、バンジョーのジョニー・セント・シア、ルイ・アームストロング、そしてアームストロングに始めてのプロの仕事をあげたキッド・オリが36年ぶりに共演(写真右上)、まさにジャズ史における歴史的な企画となった。この場面は撮影され1962年制作のテレビ番組『ディズニーランド・アフター・ダーク』に挿入された。

デキシールランド・アット・ディズニーランドの企画はその後8年間続き、1963年にはより手の込んだ水辺のスペクタ

キュラーも登場した。6種類の場面から構成されたマルディグラ・オン・ザ・リバー (河の上のマルディグラ)は、ニューオリンズのトランペッター、アル・ハートを“マルディグラの王様、レックス(Rex)”に迎え、大きな野外のリバー・ステージに、300人もの歌手、ダンサー、デキシールランド・ミュージシャンが登場した。3エーカーの広さの会場のあちこちに、派手に飾りつけられたバーボン・ストリートの山車、マークトウェイン号、“ポンチャートレイン湖”と名付けられたダンス・パビリオンもつくられ、背景は色とりどりのライト、ニューオリンズの船着き場周辺、フォーマルな舞踏会の様子、そして大理石の柱やクリスタルのシャンデリアが再現された。



Left: Armstrong is reunited with Hot Five veterans Johnny St. Cyr and Kid Ory on the Mark Twain, a recreated Mississippi riverboat at Disneyland. 1962. Courtesy

might have hope keyboard than h had clearly affec

1965年から1970年の間、メインのイベントは伝統的に“テイルゲイト・ランブル”として、メイン・ストリートUSA周辺を会場に開催された。バンドは車に乗り、たいまつを先頭に園内をパレード、その後一晚中演奏が続いた。

この時期に出演した有名バンドには、ターク・マーフィー、ドック・スーション、エディー・コンドン他のグループがある。

## “冒険とファンタジーの国”が 大きな第一歩を踏み出した！

1955年の開園から最初の5年間、ディズニーランドは“冒険とファンタジーの国”として世界に知られるようになった。そしてそれに続く10年、『デキシールランド・アット・ディズニーランド』の登場で、ウォルト・ディズニーの最初の“魔法の王国”は、世界有数のミュージカル・エンターテイメントのセンターのひとつとして、大きな第一歩を踏み出したのだ！

(完)



## サッチモちょっといい話 サッチモとティスニー ③

——外山喜雄

### 夢と魔法の王国を作ったティスニー ジャズの王様サッチモは似たもの同士

サッチモが他界したのは1971年7月6日、まだ69歳だった。サッチモが永遠のヒットソングとなる『この素晴らしき世界』を吹き込んだのは、他界する4年前の1967年、そして夢と魔法の世界を創ったウォルト・ディズニーの名曲を集めた『ディズニー・ソングス ザ・サッチモ・ウェイ』を吹き込んだのは亡くなる3年前の1968年だった。人々から親愛を込めて“ポップス”（親父さん）と呼ばれたサッチモの、愛の世界を代表する二つの企画が、亡くなるほんの少し前に実現したのは、私たちにとって、サッチモにとって、そして世界にとって、とても幸運だったと思う。

“サッチモが世界に残したメッセージ”ともとれる愛のアルバム、サッチモはどんな気持ちでこの吹き込みをしたのだろう。ルイ・アームストロングの晩年、サッチモが亡くなるまでオールスターズのクラリネット奏者をつとめたジョー・ムラーニーにこんなことを聞いたことがある。

「ポップスは、どんな気持ちで『ワンダフルワールド』や『ディズニーウェイ』を吹き込んだんだと思います？」

彼の答えはこうだった。

「世界を変えてやろうとか、そんな大それた気持ちじゃないさ。ただ人間、誰でも年をとって‘死’を考えるようになるとそうなるように、親父さんも愛とか、世界とか、そういうことを深く考えるようになったってことだと思うよ」

### 年を重ね愛と世界を深く考えた？ 自分の本分に忠実な“仕事人間”？

元コロンビア・レコードの大プロデューサー、ジョージ・アバキアン氏もこういう。

「初期のホット・ファイブやセブンは別にして、メジャーになってからサッチモが吹き込んだ数千曲の中で、自分がやりたいと主張して吹き込んだ曲は、自分の愛器だったセルマー社のラッパの広告のような曲『ラフフィング・ルイ』ほか数曲しかないよ。あとは、皆マネージャーとレコード会社が決めて彼はその言うとおりにしただけさ」

肩すかしを食らうような答え。でも、以外とサッチモはそうなのだ！！ 彼のこんな言葉がある。

「自分の仕事は、歌って吹いて人を喜ばせること。自分は一番得意なことだけをやりたいんだ。他のことは人に任せてね」

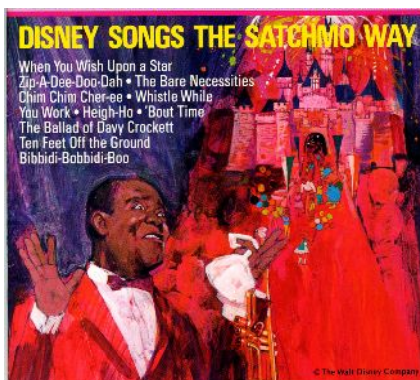
自分の本分に忠実な“仕事人間”サッチモの姿が見えてくる。サッチモはあるインタビューでこう語っている。

「確かに私は色々な国へ行って、王様の前や法王の前でも演奏したさ…若くて駆け出しだったニューオリンズ時代に、私が将来こんな事になるなんて誰かに言われたら、怖じけずいってしまったと思うよ！ 私は大物になろうなんて思った事はない。ただ、目の前のお客さんに喜んでもらおうと毎日必死になってやってきただけさ。で、ある日、気が付いたらこうなっていただけなんだよ」

### 王様や法王様の前でも自然体 「お客さんさえ喜ばばいいのさ」

ついこの間デビューしたような若いのが、自分のことを当たり前のように“アーティスト”と呼び、自分の曲を“作品”と呼ぶのが常識のようにになっている昨今、うう～ん…いや、好きだね、私はサッチモのこの姿勢。

ただただ目の前のお客さんを喜ばせようと必死になって十一年…気がついたら法王様、王様の前でも演奏、アメリカの音楽大使にもなっていた。そんな経験を積み、世界観が広がり、そして老境に入ったサッチモに、世界への愛をテーマにしたような曲が“仕事”として舞い込み、世界的なヒットが生まれる。いや、なんたるこの自然体！！ 何度も言うけど、ホント好きです、僕は、こういうの！！ サッチモのこの名言もどうぞ！



『ディズニー・ソングス ザ・サッチモ・ウェイ』(PCCD-00011)から

「私は、自分の出来ることをひけらかして自分の才能を証明しようなんて、思ったこともない、ただ、目の前にいる人々のためにグッド・ショーをしたかっただけさ。私の人生はいつも音楽だった。いつも音楽が最初。でも、音楽は一般の人々に理解されなければなんの価値もない。お客さんのために生きる、それがニューオリンズのオールドタイマー達から私が学んだ事さ。いつもこう言い聞かされたんだ、メロディーを大切にってね。“人々に喜んでもらうために”あなたがいるのだから…」 夢と魔法の王国、ディズニーランドを造ったディズニーとジャズの王様サッチモ。アメリカの20世紀を代表するこの二人の巨人は、何だか、すごく似た者同士のような気がする。